(財) 日本野鳥の会
新潟県支部報
83年4月1日 No.15(冬・春)

日本野鳥の会新潟県支部
〒959－44
新潟県東蒲原郡津川町
三郷 1193番地
渡部 通方
TEL 02549(2)5045
振替 新潟 1－6002

私のフィールド

ヤツガシラの散歩道

藤田英忠(豊栄市)

昨年の3月下旬，ひょっこりあらわれたヤツガシラには改めて自分のフィールドの新鮮さを味わった。何となく大陸な匂いを漂わす風貌に親しみを感じ，3日間程じっくり観察させてもらった。海岸の松林とニセアカシア林の間に細長く広がる田んぼと，採ガス用基地とが何となく牧歌的なのどかさをかもし出し，卒業生が尋ねてくると，二人で話しながら歩いて時間をつぶす。ヤツガシラもその卒業生が最初に発見してくれた。

新潟市の中心地から新発田方向に海岸沿いの県道を車で走ること30分，東港に近い太夫浜の砂丘に建つ敬和学園高校が私の勤務地，その裏が私のフィールド，というには純(なまくら)なマイフィールドである。

しかし，その自然は折りにつけ報告しなければならない魅力がある。植物では，ハマナシの円形大群落，ハイネズ，キリンソウ(ベンケイソウ科)，ヤブカンゾウは特に注目に値し，その他砂丘植物はもれなく存在する。

先の秋に海に出て，シギ・チドリを観察していた時，イソヒヨドリの美しい姿勢につい見とれてしまった。松林の中に入れば，林床・低木林として，ヒョウタンボク・エノキ・ノイバラ・イシミカワ・ニワトコ・ツタウルシ・ノダフジなどが混み入り，野鳥が遠くから種子を運んできて育ったであろうガマズミの赤い実が美しい色を添える。そして，この隣りにはニセアカシアのさながら原生林を現わせる巨木が，また時の野鳥を喜ばす。

ヤツガシラが飛来した太夫浜の風景

最近は少なくなったトラツグミの声は，私を最初にこの世界に引き入れた。

クロツグミとアカハラの掛け合いで始まる春のラブソング，ときおりキジ・カッコウ・ホトトギス・ツツドリが間を置いて鳴くと，またオーケストラとなっていく。さわがしくディスプレイをするオオジシギには，何ごとが起こったのかと，空を見上げたくなる。こ

のように目立つ鳥の陰にあって，先に上げた林ではサンコウチョウ・アオジ・シジュウカラ・ビンズイガ，陽あたりの良い林のソデではホオジロ・ウグイス・センダイムシクイ・コムクドリが美しい声を聞かせる。田んぼでは，アカエリヒレアシシギやオシドリがえさを啄(つばま)み春の散歩道は楽しくなる。

カヤの穂先でホオアカ・モズ・オオジュリンがキョロキョロしている風情は，田植えに勢出す人間共をものともしていない。秋から冬にかけて，ハクチョウ・カモが体を休め，タゲリが雪の中をミューミューと鳴いて遊ぶ姿に自然のあわただしさを感ずる。まだ風来坊的に見てまわっているにすぎない野鳥だが，未熟な小生のメモをひもとくと62種，もっともっと確認できる種があり，予想では80種を超えるはずである。

今年1年，じっくりと探鳥してみようと思う。

期待大きい指導員養成講座

事務局　渡　部　　通

日本野鳥の会の会員数が一万人を超え，日増しに高まる自然指向の中でさらに会員数は増加傾向を示してきています。新潟県支部でも発足当初60余名が今では200名を突破し，事務局体制も強化してゆかなければいけない現状です。日本野鳥の会とバードウオッチングが広く受け入れられ，会員が増えてゆくことは，本会がより強力な自然保護団体として活躍してゆけることにつながります。ところが，新入会員が増えてゆくと探鳥会で十分な指導ができない等といった話も聞かれる昨今です。胸ときめかせながらバードウオッチングに仲間入りしてくれた人たちです。「県支部の探鳥会は良かった」と言ってもらうようにしたいものです。そこで全国的に「リーダーを養成しよう」という気運が高まって，本部において1981年秋から「中級指導員養成講座」がオープンした訳です。一昨年は県支部から，山本明副支部長，新潟市の高橋秀恵氏白井康夫氏の3名が受講し，各探鳥会でリーダーとして活躍していただいています。

ここで言う「中級指導員」は，日本野鳥の会の理念をよく理解し，それを探鳥会などの場を通じて会員の皆さんや一般参加の人たちに伝えるリーダーを養成できる人を指します。毎年10月に開かれるこの講座では，日本野鳥の会の理念と現状，自然保護論，支部運営法探鳥会指導法などについて講義と実習が行われます。私も昨年この講座を受講し，ここでは講座内容についてふれてみたいと思います。

◎第1日目
- 日本野鳥の会の現状と展望。
- 日本野鳥の会と自然保護。
- 日本野鳥の会と探鳥会。
- 探鳥会と自然保護。
- 探鳥会運営の現状と問題点。

◎第2日目
- 探鳥会実技（明治神宮にて，模範探鳥会指導の見学）。
- 探鳥会設定とプログラムの作成。
- 探鳥会マニュアルの作成。
- 探鳥会指導アイデア。
- 指導テキストの企画と作成。
- 翌朝の探鳥会実技の準備，打合せ。

◎第3日目
- 探鳥会実技（明治神宮にて，グループ毎にリーダー実習）。
- 安全対策と救急法。
- 運営スタッフの編成と役割分担。
- 今後の課題と支部での取り組み。

以上，簡単にポイントを述べましたが，支部報13号に山本副支部長の詳細な解説及び報

告が掲載されていますので参照して下さい。

バードウオッチングが一般化して，これからはますます多くの人たちが探鳥会に参加されることを考えますと，指導員の不足が指摘されます。いま，ブロック単位での「初級指導員研修会」が各地で行なわれており，新潟県支部でも今年度の早い時期に開催したいと考えています。ぜひ多勢の方々の御参加をお待ちしています。

＊＝＊＝＊

学校の鳥の剥製

柏崎市　小林成光

仕事の関係で，柏崎市内のすべての小中学校の校舎内を拝見する機会を得た。新築されたばかりの学校を除けば，どの学校にも剥製はあった。それは全くといってよい程教材として使用される様子はなく，理科準備室や廊下，あるいは階段の踊り場などの古びたケースの中に放置されてあった。

色はあせ，虫は食い，羽が抜けてボロボロになってホコリにまみれている。目の無い鳥もあれば頭の無い鳥もある。臭いもある。これでは鳥というものは汚ない，不潔，気持ち悪いと連想しても，鳥は美しいだの，可愛いいだの，大切に保護したいなどとは御世辞でも言えたもんじゃない。

子供は美しい蝶や花，昆虫には関心があっても，鳥には関心がないのは，〝鳥はすぐに逃げてしまう，虫みたいに捕獲できない〟などという理由の他に，あんがいこんなみすぼらしい鳥を毎日見ているからかも知れない。

剥製のほとんどは地元で捕れた物を地元の剥製業者が作製したものと思われるが，名前の付いている剥製の内，その何割かは別名や方言が付いている。間違いのない剥製はないといっても過言ではない。中にはていねいな説明を書き込んである剥製もあるが，その説明も全くデタラメのものも多い。こんな物が本当に教材として役立っているのだろうか。

イソヒヨドリがイワツグミ，アカエリヒレアシシギがトウネン，イヌワシがタカなどは，その地方の方言を知るうえで参考にもなるが，アビがサカツラガンなどと方言とも言えないものも沢山あった。名前は別名が付いているが，珍しいイヌワシ，オオワシ，アカツクシガモ，ウミスズメ類，シギなどもいくつかあったし，中にはナベヅル，カササギ，ネッタイチョウなど，他の地方から持ち込まれた物もいくつかあった。

まるでゴミみたいな剥製でも，市の備品であったり，寄贈されたものであったりで捨てることが出来ないのが実情のようだ。しかし美感をそこね，不衛生でまるで役に立たない教材であるならば，害はあっても利は決してないものと思われる。子供は毎日このみすぼらしい鳥を見ているのだ。野鳥愛護林校に指定されている学校もあり，野鳥を通して教育を考えようとするならば，まずこのみすぼらしい鳥達のことを，関係者は頭に入れておく必要があるように思う。野鳥は決してキモチ悪くはないのだ。

ぐぜり

新潟市　佐藤　弘

先日，瀬戸市のある焼物メーカーの方に会いました。ここの製品はすべて外国向けの鳥の置物で，毎年クリスマス前には外国との取り引きでおお忙しとのことです。なかには2m程も翼を拡げたワシ，外国の図鑑と首っぴきで作るものなど，さまざまだそうです。何に由来するのか，床の間に猛禽の死体を飾ると言う悪習を持つ国から見れば，かの国が何ともうらやましい限りです。

福島潟鳥類観測ステーションについて

新潟県環境衛生部　風　間　辰　夫

現在日本には，鳥類観測所が55カ所あり，そのうち1級ステーションが9カ所，2級ステーションが46カ所となっています。新潟県では，福島潟が1級，柏崎，粟島がそれぞれ2級の3カ所あり例年数々の実績をあげております。福島潟のステーションは日本で一番立派な建物として，昭和57年度に増築され約60坪（198㎡）の3階建となりました。

福島潟のステーションはどんな目的で，またどんな役割を果しているのか簡単に説明いたしましょう。

1.　目　　的

渡り鳥条約等（昭和47年アメリカ，昭和48年ソビエト，昭和49年オーストラリア，昭和57年中国）に基づく〝渡り鳥〟の国際研究及び保護のため，鳥類の生態を具体的に究明するための仕事として主として，標識調査（すべての鳥類を捕獲してリングはめて放鳥し，後日これを回収する調査）をすることが目的です。

2.　運営管理

これは環境庁から委託を受けた山階（やましな）鳥類研究所が行なっており，責任者は同所の標識研究室長吉井正氏であり，福島潟のステーションの担当者はあの有名な〝ヤンバルクイナ〟を発見し日本鳥学会から鳥学研究賞を受けた主任研究員の真野徹氏です。

3.　役　　割

1の目的にそって，鳥類の生態，特に各種鳥類の成，幼鳥の判別，羽色の変化，渡りのルートを具体的に調査しています。

一番の役割は，全国のバンダー養成所として，昭和55年から毎年70～100人のバンダー志望者の指導養成をしております。現在バンダーとして環境庁のライセンスをもらって仕事（ボランティアが中心）をしている人の数は全国で200人位です。このうち新潟県では15人がおり3カ所のステーションで活やくしています。また中国やアメリカ等のバンダーとの交流もはかり国際的な鳥類の研究の場となって将来共同研究も行なわれることになっています。

4.　新潟県の野鳥保護団体の皆さんとの関連

一般県民の皆さんとはさして関係がありませんが，野鳥保護団体の皆さんとは大いに関連があるでしょう。バード・ウオッチング等で，不明の点や疑問を発見したら，ステーションを利用して正しい答えを得るようにしたらよいと思います。ステーションには，各種鳥類の成，幼鳥の虹彩の色，羽色の変化などを写真にとって保存してありますし，標識鳥は昭和48年からのものが全部集録されています。また日本全国の鳥類に関する情報も聞かれますので是非利用していただきたいと思います。

福島潟でヤマセミ，タマシギ，カワガラスが見られたといったら単なる観察（バード・ウオッチング）では信頼されない場合が多いでしょう。この他に珍島渡来の記録はたくさんあります。

5.　利用されたい方への便宜

福島潟ステーションを訪問したり，勉強したい方は

新潟市坂井1398－3　風間辰夫

ＴＥＬ　68－3660へご連絡ください。

（昭和58年4月20日ごろまでに山階鳥類研究所の福島潟ステーション勤務日程がきまります）

みんなのページ（名地からのたより）

ワシ情報

❋その１❋　　長岡市　**塚越　大助**

オジロワシのくるのが遅いので心配していたところ，１月19日（昭和58年）にようやくあらわれました。前のシーズンは56年12月７日，その前のシーズンは56年１月２日でした。これらは，ぼくの見た記録でその前にも来ているかもしれませんが，今年は遅すぎるのではないかと思います。今年，冬鳥が全体に少なかったというのもとても気になります。

❋その２❋　　柏崎市　**伊平　清士**

１月22日，雪降りの柏崎市越後広田駅上空でオジロワシ成鳥１羽を確認。２月11日，小林成光氏よりの連絡で氏の鳥友，石綿さんが見たと言うオオワシらしき鳥を三人で見に行きました。柏崎市南鯖石田島地内鯖石川でオオワシ若鳥１羽確認しました（写真もバッチり撮りました）。川に捨てる魚のアラを食べにトビ，カラスがいつも多数います。バードカービングを始めました。木彫の材料のほしい方，安く安く荒彫を作ってあげます。

☆連絡先…〒949－37　TEL（02572）－3059
柏崎市北条　伊平清士まで

❋その３❋　　長岡市　**太田　実**

２月23日…午後２時30分，大河津分水信濃川でオオワシの成鳥１羽を観察

２月24日…午後12時40分，前日と同地点でオオワシの成鳥１羽を観察（この日は写真を撮りましたが成功したかどうかわからない，未現像）。

❋その４❋　南魚沼郡塩沢町　**桑原　民生**

ワシ類の12時間観察が行われた。場所は十日町市近辺の信濃川の四ケ所。調査人員は十日町や津南の高校の先生や十日町野鳥の会の会員等12名。時間は昭和58年３月４日６：00～18：00。

この調査でオジロワシの成鳥が３羽。オオワシの若鳥が１羽確認された。オオワシの若鳥は２月11日と２月24日にも観察され，ウミワシともいわれているオオワシが，この山深い地域に定住しているように思われる。

また，オジロワシの幼鳥１羽も，調査日には認められなかったが，今年になってから確認されている。

以上の結果，オオワシ，オジロワシあわせて，少なくとも５個体はこの地域に棲息していることになるが，このように多くの個体が棲息している地域は，県下でも他に例がないのではないかと思われる。このことは，この地域が本年度より休猟区に指定されたということと無関係ではないようだ。

❋その５❋　　栃尾市　**箕輪　貴一**

１月４日…午前８時40分，栃尾一見附境界近くの東山で，１羽のオジロワシが信濃川方向より飛来。上空を旋回，2～3分後さらに別の２羽が加わり，合計３羽で旋回した後刈谷田川方向に飛び去る。

２月19日…（午前８時）と３月４日（午後12時５分），幼鳥と思われるオジロワシ１羽を別の場所で同じ方向に飛んでいくのを確認。毎年，東山を越えていくオジロワシを確認。

❋その６❋　　柏崎市　**小林　成光**

58年２月８日…柏崎市内南鯖石の山根橋付近で，オオワシの亜成鳥が１羽観察された。この鳥は３月５日まで当地にいた。

２月27日…上と同場所でオジロワシが観察され，この日はオオワシもいっしょに認められた。

＜上越より＞　　上越市　古川　弘

57年8月31日…アカツクシガモ♀1　（朝日池）

9月19日…コアオアシシギ1，ツルシギ2，クサシギ1　（鵜の池南側の水田）

9月26日…アカツクシガモ♀1　（鵜の池午前11時50分～午後1時30分）

9月30日…アメリカウズラシギ1　（頸城村増田地内，重箱池）

10月3日…オジロトウネン1　（同上）

10月5日…エリマキシギ♂1　（同上）

10月31日…ハイイロガン1，ヒシクイ173，マガン20　（朝日池）

11月3日～12月14日…オカヨシガモ　（1番，多い時には9羽，朝日池）

11月6日…アメリカヒドリ♂1　（朝日池）

12月14日…カワアイサ♂6，♀4　（朝日池，これまでの観察で最多）

58年1月15日…アトリ100＋，200＋の2群（朝日池周辺の水田）

2月1日…ヒシクイ992＋，マガン13＋（朝日池）

2月20日…ハマヒバリ1，ユキホオジロ♂1，冬羽　（直江津港）。その後一周間以上滞留したこの2羽は，常に〝つがい〟のように行動を共にしていた。ユキホオジロは枯草やガレキの所で盛んに採餌していた（8㎜の記録有）。

＜たより＞　　元上越市　岩島　裕子

新潟支部の探鳥会に出ないまま東京にひっこしてしまいました。上越の方に自宅があるので新潟へ帰ることも多いと思いますが，最近東京支部での探鳥会へ出かけたのでそのことについてお知らせします。新潟での鳥だよりを送ることができないことすみません。

多摩霊園ではつぎのような鳥に出会いました。キジバト，ビンズイ，ヒヨドリ，ジョウビタキ，シロハラ，ツグミ，ウグイス，エナガ，シジュウカラ，ホオジロ，カシラダカ，アオジ，カワラヒワ，イカル，シメ，スズメ，カケス，オナガ，ハシブトガラス，ヒガラ，ヤマガラ，コゲラ，チョウゲンボウ。多摩川では，カイツブリ，イカルチドリ，タヒバリ，タシギ，イソシギ，コサギ，アオサギ，オナガガモ，コガモ，ミコアイサ，セグロセキレイ，ノスリ，ハクセキレイ，ユリカモメ，トビをみました。この他，明治神宮でウグイスの地鳴きを聞いたり，きれいなオシドリをみかけました。また，大井野鳥公園ではオオバンを観察しました。去年1年間，私が住んでいた上越の家の部屋からみた鳥はつぎのとうりです。キジ，キジバト，スズメ，ムクドリ，ツグミ，カワラヒワ，ハクセキレイ，カルガモ，オナガ，モズ，ハシボソガラス，トビ，カモメ，コサギ，シジュウカラ。

＜魚沼より＞　　塩沢町　木下　弘

2月18日…魚野川中野橋（塩沢町）でカワセミ1羽。ムクドリの活動が活発化(仙石)。

2月20日…深夜午前2時頃遠くでフクロウの声（仙石）。

2月26日…シメが冬囲いの樹木にもぐりこんで餌をさがしている（五十沢）。

2月27日…アオゲラが自宅の軒下をつっつきまわる音で目をさます（仙石）。

2月28日…ヤマセミ雌雄上空高く飛びまわる（五十嵐）。残っていたナンテンの実にヒヨドリがよく来ています。

私もできるだけ早くウグイスとツバメの初認をしたいと思いますが，支部報にその記事をのせて下さい。最近まるっきりフィールドにでず，もっぱらツバメの調査結果の整理と学年末事務に追われています。

＜珍客＞　　柏崎市　小林　成光

57年10月25日…柏崎市安政町の（汚水）終末処理工場において，クロコシジロウミツバメが保護された。天候と体力の回復を待って，後日標識・放鳥された。この間，鳥にはギス(魚)が与えられた。

＜猛禽＞　　栃尾市　**箕輪　貴一**

1月2日…午前8時，見附市八丁沖で，カワラヒワ，スズメ，カシラダカの群れに1羽のチゴハヤブサが狩りを試みた。だが，先に気づかれて失敗，2～3分休んだ後飛び去る。

3月末頃には，ミサゴが営巣のため，また栃尾にもどってくるでしょう。

＜近況＞　　新潟市　**高内千香子**

野鳥の会に入会して一年。なかなか探鳥会にでられず，送っていただく資料や，野鳥の会出版の本をみながら鳥の名前を覚えているところです。そういうわけで，今回は〝鳥だより〟をお送りすることができませんので失礼させていただきます。今年は探鳥会にも出て，〝鳥だより〟を作りたいと思っています。今後もよろしくお願いいたします。

＜秋と冬の佐潟より＞　新潟市　**高辻　　洋**

佐潟は周囲を林や畑に囲まれており，角田山にも近いため，水鳥だけでなく小鳥やワシタカ類も多く見られます。夏の一時期を除いてほとんど佐潟へ通っていますが，とにかく数多く見たい私には最適です。

秋から冬にかけての様子をお知らせしますと，まず，カモ類は10月末には相当数が渡来します。シーズンを通して数の多いのは，マガモ，コガモ，オナガガモ，カルガモで，あまりの多さにカウントは始めからあきらめています。ヒドリガモ，トモエガモ，ハシビロガモ，ヨシガモは，数は多くはありません。ただ厳冬期に100羽以上のトモエガモを見ることがあります。オカヨシガモ，ホオジロガモは珍しい方です。キンクロハジロ，ホシハジロは春先に多く見られます。大雪が降るとヒシクイの大群が入ります。今年の大雪の際も1,500羽以上がみられました。小鳥では，カシラダカ，シジュウカラ，エナガなどの群れがよく見られます。稀にアトリの大群が飛来することがあります。今年はアカゲラ，コゲラがよく見られました。タシギ，タゲリも珍しくはありませんし，ダイサギ，アオサギ，コサギは年間を通して見られます。ワシタカ類では，オジロワシは冬中通えば必ず見られると思います。オオワシは今年はまだ見ていません。チュウヒ，オオタカなども見られます。ハヤブサやハイイロチュウヒをぜひ見たいと思っていますが，まだ果たしていません。

今年の珍しいものとしては，11月28日にミヤマホオジロ♂1を見ました。また，12月19日に，オオタカの若鳥が水辺の杭をポイントに舞いあがっては元にもどる飛行練習のような動作をしているのを見ました。1月15日にはムナグロの冬羽と思われるものが出ています。ツグミと同大でしたのでダイゼンではないと思われますが，時期と場所を考えるとあまり自信はありません。

これから春先の渡りのシーズンになりますと，珍客にお目にかかることがよくあります。シマアジ数羽は必ず入るようです。そのほか，これまでにノゴマ，ノビタキ，ミソサザイ，アリスイ，カワセミなどを見ています。カモの大群の渡来する10月から私の一番好きなオオヨシキリの鳴き終わる7月初旬まで，佐潟では季節の移り替りを感じながら鳥をたのしむことができます。佐潟には公園計画があるようですが，これまでの「開発」とは無縁な内容の計画であってほしいと思います。

＜阿賀野川河口より＞　新潟市　**高橋　正良**

支部報№12（81年10月30日）で千葉晃さんが新潟空港の鳥について報告されました。私も千葉さんの御指導をいただき観察をしている一人です。私たちの観察した鳥は実に11目26科89種におよびます。ごく大ざっぱなリストですし，たいへん長くなりますが「日本野鳥リスト」の順に報告します。

カイツブリ，ハジロカイツブリ，ヨシゴイ，ゴイサギ，ササゴイ，アマサギ，ダイサギ，コサギ，ヒシクイ，オオハクチョウ，マガモ，カルガモ，コガモ，オカヨシガモ，ハシビロガモ，キンクロハジロ，スズガモ，トビ，オ

ジロワシ，ノスリ，チュウヒ，ハヤブサ，チョウゲンボウ，バン，オオバン，コチドリ，シロチドリ，メダイチドリ，ムナグロ，ダイゼン，キョウジョシギ，トウネン，ヒバリシギ，ハマシギ，サルハマシギ，オバシギ，ミユビシギ，アオアシシギ，タカブシギ，キアシシギ，イソシギ，ソリハシシギ，オオソリハシシギ，ホウロクシギ，チュウシャクシギ，タシギ，オオジシギ，アカエリヒレアシシギ，ユリカモメ，セグロカモメ，オオセグロカモメ，カモメ，ウミネコ，アジサシ，コアジサシ，キジバト，カッコウ，アマツバメ，ヤマセミ，カワセミ，ヒバリ，ショウドウツバメ，ツバメ，コシアカツバメ，イワツバメ，ハクセキレイ，セグロセキレイ，タヒバリ，ヒヨドリ，モズ，アカハラ，ツグミ，オオセッカ，コヨシキリ，オオヨシキリ，セッカ，シジュウカラ，ホオジロ，ホオアカ，カシラダカ，アオジ，ユキホオジロ，カワラヒワ，ベニマシコ，スズメ，ムクドリ，オナガ，ハシボソガラス，ハシブトガラス。

河口はミニチュア北海道といった様子です。年中飛行機の爆音がし，強風が吹きます。決して野鳥にとって住みやすい環境とは思えません。空港が立入禁止のため，あるいは冬期の悪天候のため人があまり近寄れないことが幸いしているようです。しかし，最近発砲が禁止されるまで，ハシボソカラス，ヒシクイが打たれました。コアジサシの営巣のころはゴルフ練習，犬の散歩が無残な様相を作りだします。現代では川を巨大な排水路としか扱いません。空港は安全な空の便のためだけに存在しています。決して野鳥たちの「楽園」ではないのです。阿賀野川の流量を2年間観測してきた私にとって河口は人間と野生の動植物の悲惨な接点と思えるのです。

私の1枚　……ワンチャンスで6種

（柏崎市　小　林　成　光　氏撮影）

探鳥会の記録

★ 朝日池探鳥会（57年11月７日）

この日心配された天候も，曇り空ながら何とか持ちこたえてまずまずの探鳥日和となる。

柏崎から，市の青少年健全育成センターが毎秋行っている探鳥会の一行（指導者は小林成光さんら本会柏崎グループ）がバス１台で参加，長岡からも子供を含めて10数名が参加その他地元の方々で総数51人（うち子供26人），さっそくプロミナーをすえつけて水面に浮ぶ水鳥類に見入る。

ヒシクイ（45羽）は間もなく飛び立ったが，コハクチョウ，アオサギ，ダイサギなどの大型鳥から雄の羽色の美しいカモ類など，子供達は代る代るプロミナーをのぞいては喚声をあげていた。ベテランの人はアメリカヒドリ（♂１羽），オオバン，カワウなどをみつけたり，あまり見かけないオカヨシガモをじっくり観察し，その♀が酷似しているマガモの♀とどこが違うか見いだそうとしていた。上空にはタゲリやチュウヒが飛び，ミサゴが来てダイビングして魚を捕ってゆく光景もみせてくれた。背後にあるアシ原には，オオジュリンやコヨシキリがまだ残り，タヒバリも飛んでいた。

昼食後，柏崎の子供達は据えつけたプロミナーに見えるのは何の鳥か，復習をかねて指導者達からテストを受けていた。子供達は皆真剣だが楽しそうだった。

ともかく，初心者からベテランまで満足できるこの日の探鳥会であり，朝日池だった。

＜出現した鳥＞カイツブリ，カワウ，ダイサギ，アオサギ，ヒシクイ，コハクチョウ，オシドリ，マガモ，カルガモ，コガモ，トモエガモ，ヨシガモ，オカヨシガモ，ヒドリガモ，アメリカヒドリ，オナガガモ，ハシビロガモ，ホシハジロ，キンクロハジロ，スズガモ，ミサゴ，トビ，チュウヒ，チョウゲンボウ，キジ，オオバン，タゲリ，ユリカモメ，キジバト，ハクセキレイ，タヒバリ，ヒヨドリ，モズ，コヨシキリ，ホオジロ，カシラダカ，オオジュリン，カワラヒワ，スズメ，ムクドリ，ハシボソガラス　（20科41種）

（担当：山本　明）

★ 佐潟探鳥会（57年11月７日）

晩秋の１日，新潟市赤塚の佐潟において，本支部と地元にいがた野鳥の会合同による探鳥会が開催された。淡曇で明けたその朝，参加者は会場に隣接した赤塚中学校前に集ったが，しばらくは鳥の話ならぬ火事の話でもちきりだった。当日未明，赤塚中学校が半焼したため，まだ不安そうな面持ちで見に来る地元の人々がいたし，火事場には調査中の消防署員や警察署員が忙しそうに動きまわっていて，双眼鏡をぶらさげて鳥を見に来る人々は何か場ちがいな感じがしてしょうがなかった。同校のシンボルであるハクチョウが，だれかの気転で学校の池から金久食堂の池へと保護収容されていたのは不幸中の幸いであった。参加者約50名は幹事の説明の後，互いに反対に潟を回る二班に分かれて，観察を開始した。水鳥たちは晩秋の静けさと寒さの中で，何事もなかったような生活ぶりであった。また，ハクチョウの数は少なかったが，023 Cの首輪をつけたコハクチョウがいて一行の話題になった。マガモやコガモも多数みられたが，雄はまだ換羽を終えていないものが多く，初心者の中には図鑑と大部ちがう事に気付き，大きくうなずく方もあった。ダイサギ，コサギが，岸辺にたたずみ，カモ類は採餌と整羽に余念がない。チュウヒが飛ぶ。全身まっ黒のオオバンが８羽も出た。この潟での最高記録だ。ヨシガモやキンクロハジロも姿をみせ，いよいよ潟は冬近しの観を強くしていた。

（担当：千葉　晃）

★ 寺泊探鳥会（58年２月６日）

冬季に於ける海鳥の探鳥会が，今年も２月６日に予定通り実施された。この寺泊探鳥会

は1979年２月に初会を持ち，毎年，当地でこの時期に行なわれ，今年はその５回目。厳寒の季節であるにも拘らず，例年県下各地から多数の熱心な参加者がある。今回は夜明け前から，雷鳴を伴う降雪があり，参加者の減少や，フィールド観察の困難さ等を心配していたが，頼もしい小学生も混じえ総勢37名が参加した。午前10時より寺泊町体育館２階研修室で，大島支部長の挨拶に始まり，当地域の海鳥（主としてカモメ類）について若干の説明，続いて日程と野外観察の為の班編成等の連絡がある。10時40分からＡコース（寺泊港～新信濃川河口），Ｂコース（寺泊～出雲崎港）の２班に分かれて観察地へ。雪も小降りとなって晴間も見え，この時節の日本海としては穏やか過ぎる。Ａコース班が，先ず立寄った寺泊港では，中央防波堤の北端に約500羽のカモメ類とウミウを確認出来たものの，危惧した通り鳥達は沖に出ているようで，港内や海岸線にあまり集まらず，距離がありすぎた感がある。しけて，防波堤に砕ける怒濤の飛沫が高く飛び散る様な日には，カモメ達が頭上に飛び交い，様々な角度から充分に観察出来，好条件なのであるが残念であった。12時40分頃，会場に戻り，歓談を交えての昼食，１時30分から観察した鳥合わせ，自己紹介最後に意見交換を行い閉会となった。

＜確認した鳥＞

アビ，ハジロカイツブリ，アカエリカイツブリ，ウミウ，ヒメウ，マガモ，クロガモ，ビロードキンクロ，ウミアイサ，トビ，トウネン，ユリカモメ，セグロカモメ，オオセグロカモメ，ウミネコ，ウミスズメ，ハクセキレイ，タヒバリ，ヒヨドリ，イソヒヨドリ，カワラヒワ，スズメ，ムクドリ，ハシボソガラス，ハシブトガラス　（担当：渡辺　弘雄）

調査と観察の記録

1982，1983年ガン・カモ・ハクチョウ類全国一斉調査（新潟県分）の結果について

調査研究部　小野島　　学

Ⅰ．はじめに

本調査は，冬季，日本に渡来するガンカモ科の鳥類とオオバンについて，その種類，個体数および生息環境を毎年継続調査・分析し，これらの保護に役立てようとするものである。これは日本野鳥の会が1982年より全国一斉に実施しており，新潟県支部からも多数の方々が参加・協力され，このほどその結果がまとまった。そこで，以下にその概要を報告する。なお，1982年の結果をまとめたものはStrix（日本野鳥の会研究誌，入手可能）Vol. 1（1982）に掲載されているので一読をおすすめする。

Ⅱ．調査地と方法

調査地には，例年ガンカモ科鳥類の渡来数の多い地域を中心に，1982年は21カ所，1983年には20カ所を選んだ（表１）。調査対象はガンカモ科鳥類およびオオバン（クイナ科）であるが，後者はIWRB（国際水禽調査局）の調査対象種のため，特に選ばれたものである。各年共１月15日（できる限り午前中に実施）に調査を行ない，確認した種と個体数は所定の調査用紙に記録し，調査地の環境も調べた。本県では，野鳥愛護会がすでに昭和44年度（1970年）より「ガンカモ科鳥類の生息状況調査」として実施しており（野鳥愛護会事務局，1983），本支部もこれに合同して調査を行なった。

Ⅲ．結　　果

①ガン類：1982年はヒシクイ1,105羽が，1983年にはマガン２羽とヒシクイ1674羽（合計1679羽）が県内４カ所（瓢湖，福島潟，佐潟および朝日池）で観察された。ガン類は例年ほとんど同地域で確認され，生息地は限ら

表１　1982年，1983年ガン，カモ，ハクチョウ類全国一斉調査結果（新潟県支部）

NO	市町村	地名	ガン類 マガン	ガン類 ヒシクイ	ガン類 計	ハクチョウ類 オオハクチョウ	ハクチョウ類 コハクチョウ	ハクチョウ類 ハクチョウsp.	ハクチョウ類 計	カモ類 オシドリ	カモ類 マガモ	カモ類 カルガモ	カモ類 コガモ	カモ類 トモエガモ	カモ類 ヨシガモ	カモ類 オカヨシガモ	カモ類 ヒドリガモ	カモ類 マメガンビリ	カモ類 オナガガモ	カモ類 ハシビロガモ	カモ類 ボラハジロ	カモ類 キンクロハジロ	カモ類 スズガモ	カモ類 クロガモ	カモ類 ビロードキンクロ	カモ類 ホオジロガモ	カモ類 ミコアイサ	カモ類 ウミアイサ	カモ類 カワアイサ	カモ類 カモsp.	カモ類 計	オオバン
1	村上市	三面川河口									1	200	8																		227	
2	〃	岩船港				4			4		2	415							4									10		4	432	
3	神林村	七潟									610	1400																1		38	2049	
4	〃	北新保大池	調査せず			20	23		53		400	300													1						702	
5	中条町	胎内川河口	調査せず								9	40	4														1				54	
6	豊栄市	福島潟	調査せず																													
7	水原町	瓢湖	963	963	7	116		123			14	13	1889	1																2	1905	
8	新潟市	阿賀野川河口	1650	1650	2	270		272			10		23																	20	57	
9	〃	〃 江口	1	1	560	1360		1920			5200	283	40																		50	
10	新津市	〃 大郷	1	1	793	857	300	1850			7967	126	3700	40			173	3	20	4	272	241	1				2				8938	
11	五泉市	〃 荻島	調査せず										1008	161			182	3	260	5	244	255					6				10217	
12	新潟市	島潟潟	調査せず										4																		4	
13	〃	低湿・比低潟	調査せず				315		315				28																		28	
14	〃	御手洗潟	調査せず																													
15	寺泊町	新潟港川河口	調査せず								2		197																	4	203	
16	〃	寺泊港	調査せず																													
17	分水町与板町	信濃川右岸	調査せず			8	96		104		251	592	10248	169	4		1		313	1		1					12			600	12192	
18	燕路町	〃 釜ノ鼻	調査せず				473		473		2625	1551	2655			5			1135		10						23				7948	
19	小千谷市	〃 峠山	調査せず			84			84				10																		6	
20	六日町	魚野川六日町	調査せず	150	150	76	327	20	583		860	120	2335	26			4		574	7	2						5			2	3856	2
21	大和町市	浅河原	調査せず	18	18	65	952	40	1057		1480	215	1920	12					620	2			1			5			1		4155	3
22	中里村	信濃川宮中	調査せず			6			6		265	1300	660						36		18	52							5		37	
23	堀山町	共同・五日町	調査せず							1	150	40	1020	8		3	1		25		1										1248	3
24	柏崎市	重要原発構内	調査せず								24	20																			44	
25	〃	柏崎港	調査せず																												6	
26	大潟町	朝日池・鵜ノ池	調査せず			84			84			32																				
27	羽茂村	大池・小池	調査せず								2500	300	50						50												2900	
28	上越市	飯ヶ城沼堰	調査せず								800	620																			1421	
		合計	11	11	1	10		11			650	1700	500															1			2861	
			5	5	12	21		33		1	3207	220	46						16				5	10	2			2			3490	
											3200	2400	570	240	2		42		162												6638	
											150	1936	1120				30		56		10						11		1		3602	
											2200	1500	1200				50		10								1			500	4961	
										1	4	1402									1										1408	
										1	3	1710	50																		1764	
			1105	1105	622	2531	20	3183		3	12400	8975	18617	239	7		308	3	1160	12	324	308	1	5	2	9	31	11	18	1192	43514	3
			1634	1639	852	2573	240	3665		1	21102	10622	10935	432	2	8	375	3	2166	17	245	255	12	10	6	86	41	3	23	81	46119	6

上段 / 下段 = 1982年 / 1983年

れていると思われる。この他大河津分水では毎年マガンが猟期の前後に観察されているので（渡辺，1980），猟期にこのマガンがどこに移動するかを調べることも重要と考えられる。

②ハクチョウ類：1982年はオオハクチョウ632羽，コハクチョウ2,531羽，不明20羽（合計3,183羽）が，また，1983年にはオオハクチョウ852羽，コハクチョウ2,573羽，不明240羽（合計3,665羽）が確認された。つまり，コハクチョウの占める割合（1982年は79.5％，1983年70.2％）が高く，県下に飛来するハクチョウ類の約7～8割はコハクチョウ，残りがオオハクチョウであることがわかった。

③カモ類：1982年は19種43,514羽が，また1983年には20種46,119羽が観察された。このうち，個体数の多いのはマガモ，カルガモ，コガモの3種で，カモ類総数の80％以上をこれら3種が占めることがわかった。また，これらは広く分布し，ほとんどの調査地で認められた。スズガモ，クロガモ，ビロードキンクロ等の海ガモは渡来数が少ないようであるが，今後沿岸水域での調査地点を増やし，これらの生息状況について情報を集めることが必要と考えられる。また，今回の調査によってアメリカヒドリ（1982年，1983年瓢湖）やオカヨシガモ（1983年鳥屋野潟および御手洗潟）のような珍しい種が確認されたことも貴重な収穫であった。

④　オオバン：本種は新潟市の佐潟と御手洗潟からだけ報告され，その個体数は1982年6羽，1983年2羽とごく少なかった。

Ⅳ．おわりに

この調査は，まだ2回しか行なわれておらず，調査地も20カ所程度と限られているので県内全域の生息状況を充分検討することはできない。来年度は調査地をさらに増加し，より充実した調査を行なっていきたい。会員諸氏に対し一層の御協力をお願いする。

最後に調査を担当された各氏の氏名を列記し，その御苦労に対して謝意を表します。

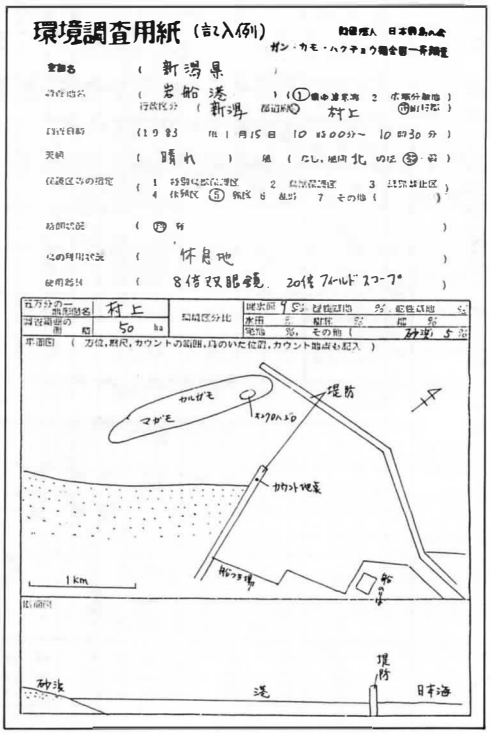
高橋秀恵，山田清，白井康夫，伊藤卓夫，大島美佐子，宮越一俊，加藤誠一，布川耕市，熊倉了一，本間隆平，吉川繁男，箕口秀夫，古川弘，吉川吉枝，末崎興助，長谷川誠，小林高臣，大島竹一，桑原民生，木下弘，渡辺央，渡部通，井上信夫，林克久，桑原滋夫，河野斉，小林成光，桑山俊英，中島公，渡辺弘雄，太田実，山谷正喜，山本明，高綱勉，西沢一郎，渡辺俊英，木下徹，古沢昭三，中山正則，小野島学。

文　献

野鳥愛護会事務局（1983）：昭和57年度ガンカモ科鳥類の生息状況調査。野鳥新潟 54，6～7

日本野鳥の会研究部（1982）：第1回ガン・カモ・ハクチョウ類全国一斉調査（1982）の結果について。Strix 1，43～55.

渡辺央（1980）：信濃川大河津分水路域におけるガンカモ科鳥類個体群の季節的変動。長岡市立科学博物館報，15，19～32.



アオゲラ（*Picus awokera*）のつつき回数について

小千谷市　中　山　正　則

Ⅰ．はじめに

アオゲラは，セグロセキレイなどとともに本邦の固有種で，当地方では低山帯の森林内には普通に見られる。小千谷市において夏期繁殖期に観察されるキツツキ類は，本種とコゲラのみであり，アカゲラは秋期から春期の間に観察される漂鳥である（中山，1996）。

このたび，アオゲラのつつき行動を観察する機会を得，〝1回当りのつつき回数〟[注1] やその他の行動を記録したので，報告したい。

Ⅱ．観察地及び記録方法

観察地への初飛来は1982年４月13日であったが，観察を行なったところ目視でもつつき回数が十分算定できたので記録した。すなわち，同年４月22日午後４時１分から午後４時41分の間の次のつつき行動をピックアップし，１回当りのつつき回数を連続して記録した。

メス　　ＰＭ４：01～４：05
オス１回目　ＰＭ４：11～４：16
オス２回目　ＰＭ４：17～４：41

また，つつき行動に伴って行なう，木の穴の中にたまった木くずをくちばしで払い出す行動を〝ムシリトリ〟と名づけ，この回数も併せて算定した。

観察記録した場所は，新潟県小千谷市船岡町小千谷市立理科教育センター裏（北緯37°18′05″，東経138°8′00″）である。対象樹木はキリであり，巣穴の位置は地上から約1.5ｍであった。

Ⅲ．結　　果

(1)　１回当りのつつき回数

１回当りのつつき回数については表１で示したが，メスの〝ツツキ〟[注2]の総計（67回）のうち１番多かったのは「２回」の26回で，これに次いで「３回」の23回，続いて「４回」，「１回」，「５回」の順であった。オスの１回目と２回目を併せた１回当りのつつき回数をみると，１番多かったのは「３回」の121回で，次いで「５回」，「２回」，「４回」，「１回」，「６回」，「７回」，「８回」，「９回」であった。１回当りのつつき回数の雌雄差については，百分率で示した（図１）。

１回当りのつつき回数の平均値を表２で示した。メスの１回当りの平均つつき回数は，2.79回で，オスの１回目と２回目を併せたときは，3.55回であった。

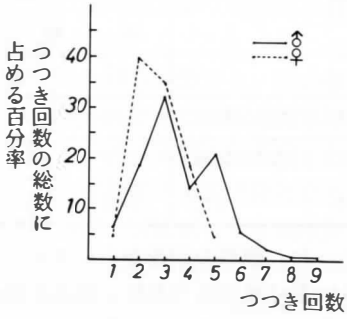


図１　アオゲラ雌雄における１回当りのつつき回数の百分率

(2)　ムシリトリ

メスの場合は，ツツキ67回の間にムシリトリを５回行ったので，つつきを13.4回するごとに１回ムシリトリを行ったことになり，オスの１回目と２回目を併せた場合は，ツツキ376回の間にムシリトリを23回行ったので，16.3回するごとに１回ムシリトリを行ったことになる。

Ⅳ．考察とまとめ

オスの方がつつき始めるとつつき時間が長く，１回当りのつつき回数もオスの方が多く，明らかにオスの方が主体的につつき行動を行ったわけである。また，オスの場合は，１回当りのつつき回数の最高が９回であるのに比べ，メスの方は５回であった。このことからもいえるように，オスの方が明らかに精力的

表1　アオゲラの1回当りのつつき回数

性別 ＼ 1回当りの1)つつき回数	1	2	3	4	5	6	7	8	9	計
メス	3	26	23	12	3	−	−	−	−	67
オス(1回目の観察)	18	59	75	33	30	1	3	−	−	219
オス(2回目の観察)	5	10	46	20	48	20	5	1	1	157
小計	23	69	121	53	78	21	8	1	1	376

表2　1回当りの平均つつき回数とその雌雄差

性別	ツツキ (A)	総つつき回数 (B)	1回当り平均つつき回数 (B/A)
メス	67	187	2.79
オス(1回目の観察)	219	670	3.29
オス(2回目の観察)	157	663	4.22
小計	376	1,339	3.55

表3　つつき回数とムシリトリ回数の関係

性別	ツツキ (A)	ムシリトリの回数 (C)	ツツキとムシリトリの間隔 A/C
メス	67	5	13.4
オス(1回目の観察)	219	15	14.6
オス(2回目の観察)	157	8	19.6
小計	376	23	16.3

であった。観察の印象からいうと，メスのつつき行動は補助的であり，外敵に対する見張役の方が主であるように思えた。このように今回の観察によれば，つつき行動に関してはオスの方が主体的であった。しかし，このことが，形態的にオスがメスよりもまさっているため，またその習性からそうであったとはいえない。限られた時間に行った観察例であるので，これは一つの現象であったにすぎない。したがって，これがアオゲラ全体のこととはいえない。こういう場合もあるのだと考えるのが適当である。いずれにせよ，他のケースは，どんなつつき行動が見られるのか興味が持たれるところである。今後の報告を待ちたい。

注1) つつき回数：つつき始めてから休止までつついた数。

注2) ツツキ回数：休止から休止までのつつき行動。

例　ツツキ　休止　ツツキ　休止　ツツキ

V. 文　献

中山正則(1976)：小千谷の野鳥，小千谷の自然，小千谷市教育委員会，pp・283〜298。

ハチクマ栃尾でも繁殖か？

栃尾市　箕　輪　貴　一

57年9月11日付の新潟日報に掲載されたハチクマの営巣発見の記事を読んで調べたところ，栃尾にもハチクマが営巣しているらしいことがわかったので報告します。

57年4月28日(晴)，正午に東山山中で上空を旋回しているところを発見(図1)。これは今年度の初認である。なお，55年は5月9日，56年は5月24日に初認している(図1)。

5月23日(晴)，午前11時30分，初認した場所より1㎞離れたところで，1羽がディスプレー(図2.3)。

6月20日……500mほど離れた山でもディスプレー

図1　ハチクマの飛翔

図2　ハチクマのディスプレー（誇示行動）両翼を背方でくっつけ，2～3回はばたき，ピィイーピッピッピッと鳴く。

図3　ハチクマの観察地点と他のワシタカ類の営巣場所を示す略図。ディスプレーはA地点で観察された。B地点は56年8月25，26日にハチクマをみた地点。矢印はハチクマが通過する方向を示す。図中の数字は営巣年度を示し，？は不確実なことを示す。

7月4日……午前11時30分，午後4時30分の2回にわたって2羽が旋回する。このうち一羽は羽が一部欠損。55年8月14日も同じ場所で2羽が通過していくのを見ている。

8月5日～25日まで観察を続けたが9月現在でも営巣場所を確認できず，また，5㎞離れた地点でもいつも同じような場所で旋回しているハチクマを観察している。1羽または2羽が一定方向に横切って飛んでいくのがみられる（図3）。

おしらせ

◎全国探鳥地案内の新版作成中。新潟県からもスタッフが加わって，よりよい内容にと目下奮闘中です。ご期待下さい。

◎4月29日は，春の全国一斉シギ，チドリ類生息調査です。多勢の支部会員が調査員となってカウントされることを期待します。尚，一斉調査《シギ、チドリ（4/29，9/15），ガン，カモ，ハクチョウ（1/15）》の代表調査員は小野島学（県支部幹事）です。

◎協定旅館〝ながさきロッヂ〟〒949－21，中頸城郡妙高々原町池の平温泉，02558(6)2261，1泊2食¥4500円。初夏の妙高々原でバードウオッチングをしましょう。マミジロやホオアカが歓迎してくれます。また，宿泊の際はぜひ「ながさきロッヂ」へ。

◎支部会員名簿の新版を作成中ですが，住所変更された方はお早目にお知らせ下さい。

おねがい

ウグイスの初鳴き，ツバメの初認，今春もまたデーターを送って下さい。

電話かはがきで結構です。

発　　行	昭和58年4月1日
発 行 所	（財）日本野鳥の会新潟県支部
	〒959－44　新潟県東蒲原郡津川町三郷乙1193番地
	電　話　02549(2)5045　渡部通方　　振　替　新潟1－6002
編　　集	千　葉　　晃